



ら若手の保守知識人は高みの見物を決め込み、「慰安婦問題なんて、そんなに大層な問題か?」と冷笑していた。

わしは「これを描いたら『右翼』のレッテルを貼られてオシマイになる」と言われながら『戦争論』を描き、奇跡的なベストセラーとなつた。

『戦争論』は個人の購読だけでなく、一家で読まれ、図書館で読まれ、毎年増刷が続き、親から子へと世代を超えて読み継がれてきたので、16年経つたら国内の言論状況は一変してしまつた。

ところがその後 小泉首相の靖國参拝やら日韓ワールドカップで湧き上がった嫌韓感情やらで「保守バブル」と呼ぶべき現象が起き、「ネット右翼（ネットウヨ）」なる連中が出現してきた。

保守系雑誌が過激なタカ派見出しで売れるようになり、ネットで何のリスクもなく極右言論が横行し、まるで左翼団体のようになにデモを繰り返す圧力団体が複数出現し、一般週刊誌までがタカ派主張を特集するようになつて、もはや何のリスクもなく誰もが「慰安婦問題何するものぞ!」と息巻く「保守バブル」の時代が到来してしまつた。

その「保守バブル」を象徴する「行動する保守」の現象について、今回は分析しよう。

そもそも保守は「庶民」の感覚であつて、デモや行動を起こすものではない。「デモや行動は、情報によつてヒマ人が群れて街頭に出でてしまうもので、それはもはや「庶民」ではなく、「大衆」という塊りである。行動する保守を最初に提唱した人物、西村修平氏は、思想や言論は唱えるだけでは「アカセサリー」のようなものでしかなく、「直接行動」だけが世の中を変えるという信条を持ち、抗議行動で「お前はシナ人か!」

# ブーマンズム RISING ニセモノ政治家の見分け方

## 第15章 安倍自民党はネットウヨと寝とうよ!

わしが『ゴーマニズム宣言』で慰安婦問題の戦いを始めたのは、もう16年も前のことで。その直後、7社から出版された中学歴史教科書すべてに慰安婦の記述が載ることが判明したのを機に「新しい歴史教科書をつくる会」が設立され、わしも参加した。

あの頃の言論空間はサヨク全体主義といふような状態だった。慰安婦は強制連行の被害者ではないと言えば、「セカンドレイ」だと非難され、慰安婦問題で日本政府が謝罪する必要はないなどと言おうものなら、「レイプ魔の擁護者」のような極悪人扱いをされ、社会的に抹殺されかねないほどの「空気のこわばり」があつた。

そんな中、わしも「つくる会」の面々も大変なリスクを抱えながら闘っていたのだが、それに対して八木秀次

「朝鮮人は出ていけ！」などと罵声を飛ばし、その様子を動画サイトにアップロードして、いち早く運動にネットを活用した。

そして、西村氏の口汚い排外主義のアジテーションや、ネットを活用した運動スタイルをそつくり真似し、「行動する保守」を標榜し、ありもしない「在日特権」を攻撃して差別感情を煽り、勢力を拡大した団体が「在特会（在日特権を許さない市民の会）」である。

10月14日の「ゴー宣道場」は、慰安婦問題、アゲイン！』というテーマで開催した。そしてその客席には、現在62歳の元祖「行動する保守」西村修平氏がいた。西村氏から道場への応募はがきが届いたので、高森氏の助言を得て参加させたのである。西村氏は一時行動と共にしていた在特会とも完全に決別しており、「脱原発」を主張し、皇統問題では「女系容認」の意見だというから、少しは話が分かるのかと思ったが、第一部が終わつたところで不機嫌そうに帰つてしまつた。

そして、提出していくアンケート用紙には……

- 1 道場で練習した結果を実践でどう生かすのか。
- 2 歴史・社会科学は自然科学と違い、実験ではなく、声の圧倒、大きさで真理が定着する。閉鎖的空間で歴史の捏造を糾したとしても状況打開は不可能である

……と記していた。

結局この人は、圧力団体こそが真理を定着するという発想から、一步も出ることができないのである。昔の左翼運動がそういう始末だったわけだが、安田浩一著『ネットと愛国』によれば、西村氏はもともと左翼の学生運動家で、今でも毛沢東の『実践論』をバイブルのようにしているそうだ。いかに保

守に「転向」したといつても、「行動」「圧力」で世の中を一気に覆そつという「革命」のイデオロギーへの情熱は何一つ変わっていない。左翼が右翼に反転しただけである。

真理は声の圧倒、大きさで定着すると西村氏は言う。「声の圧倒、大きさ」で真理が定着するのなら、中国・韓国に敵う訳がない。「反日」をアイデンティティとして教育された国民と、「声の大きさ」で戦つても勝ち目はなく、その論法の帰結は「戦争」によって真理を定着させるしかないということころまで行きつくに決まつていて。ましてやアメリカを主軸にする旧連合国歴史観（日本悪玉論）に、「声の大きさ」で太刀打ちできるわけがない。

それでも旧連合国歴史観（日本悪玉論）は真理ではないのである！

日本国内の大衆運動では、内弁慶として吠えるだけで、海外で定着した「慰安婦」とは性奴隸（Sex slaves）である」という認識を変更させることはできない。しかしながら自分が忌み嫌つているはずの中韓と同次元にまで墮ちて、「声の大きさ」で歴史認識を張り合おうとするのか、滑稽としか言いうがない。



革命思想で頭が固まつた人には、わしの『脱正義論』は決して理解できないだろう。思想を捨て、主觀だけで「正義」と思い込んだもののために運動することの快感に嵌ると、果てしなくカルト化していくという警告を描いたのが、『脱正義論』である。

わしはその本で「日常に戻れ！」と説いた。つまり「庶民」に戻れということであり、国内を、そして国外を変えられる「現場」に戻

れと説いたのである。

馬鹿は「現場」を持たない。「現場」では尊敬されない。だからこそ馬鹿の結集で圧力かける方法しかなくなるのだ。だが、『ゴーマニズム宣言』シリーズを読んで政治家や外交官という「現場」を取ったエリートになら、国際世論も変える力を発揮できるではないか！ 実際、すでに政治家にも官僚にも自衛隊にも公務員にも企業にも、『ゴー宣』の読者は入って活躍している。

「ゴー宣道場」で修練した結果は現場で生かす。たったそれだけでいい。家庭で、友人、知人で、職場で、人に信用される人物になって伝えていけばいい。すでに自ら「ゴー宣道場」を卒業して、海外に雄飛した企業人もいる。そういう者たちにデモなんかやつてるヒマはないのだ。

普段、自分の「現場」を持ち、忙しく働いて、家族を養いながら、地方からも来てくれている常識ある人々を、運動に駆り立てて遊ぶような無責任なことを、わしはする気はない。

さて西村修平氏は現在、在特会を厳しく批判しているが、『ネットと愛国』によれば、批判の要点は「在特会は罵声そのものが目的化している」「覚悟がない」「都合のよい時に、都合のよい場所で、気持ちよく発散させたいだけの運動にも見える」ということらしい。もともと朝鮮人に対する罵声は、西村氏が始めた運動手法のはずだが、まあこの批判は正しいだろう。

在特会や、それに共感するネットウヨには革命思想すらない。本気で世の中を変えようという意志など元からないのだ。ただ「現場」に打ち込めない空虚な自分を慰めるための烏合の衆なのだから。自分は恵まれていないという「不遇感」を、自力で克服する努力も怠り、すべては「在日特権」が悪いのだと責任転嫁し、日常では決して使えない差別語・侮蔑語をわめき散らかして憂き晴らしをして

いる。それだけの人間たちである。そんなネットウヨ連中は、ありもしない「在日特権」への攻撃が行き詰まると、新たな標的を作るようになる。

その代表が「反・脱原発」、そして「反・パチンコ」なのである。

連中は、脱原発運動は「反日左翼の陰謀」と決めつけ、大規模な脱原発デモがあると押しかけて、日の丸を振りまわしてデモ参加者に罵声を浴びせて「原発を守れ！」と叫んでいる。同様に、パチンコ産業を「朝鮮人の民族産業」と決めつけ、勝手に憎悪を燃やしている。

もちろん「パチンコは朝鮮人の民族産業」というのも、「自分が不遇なのは在日特権のせい」「脱原発運動は反日左翼の陰謀」と同じ、妄想の域に近い言いがかりである。パチンコ産業は、日本企業も多く参入している。「新しい歴史教科書をつくる会」で教科書の採択を熱心に手伝ってくれたJCの知人はパチンコホールの経営者だった。わしの知人には、他にもパチンコ関係の知人がいるが、全員日本人である。パチンコホールは在日コリアンの経営者の割合が高いというが、それは焼肉屋も同じではないか。だつたら「反焼肉デモ」もやつたらどうなのか？

「北朝鮮の資金源になつている」などという者もいるが、どのように、いくら資金が流れているかといった、具体的な話を彼らから聞いたことがない。どうせ例によって思い込みだけで勝手に言つてるのである。すでに北朝鮮に対しても経済制裁で送金規制が行われている。それでもパチンコが北朝鮮の資金源になつているというのなら、パチンコ産業を攻撃するよりも政府に送金規制の強化を求めるのが筋だろう。

こんなバカどもの、言いがかり以外の何物でもないネガキヤンのせいで、「ば

